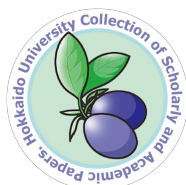




HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	思想形成期の大川周明 : 宗教と社会主義
Author(s)	工藤, 真輔
Citation	北大法学研究科ジュニア・リサーチ・ジャーナル, 15, 27-48
Issue Date	2008-12-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/40083
Type	departmental bulletin paper
File Information	JRJ15_002.pdf



思想形成期の大川周明

—宗教と社会主義—

く どう しん すけ
工 藤 真 輔

目 次

はじめに	29
第1章 青年大川周明が過ごした明治中期の日本社会	30
(1) 近代化と明治青年	30
(2) 初期社会主義	30
第2章 大川周明とキリスト教	31
(1) キリストとの出会い	31
(2) 大川周明のキリスト教認識	32
(3) 宗教と社会主義を架橋するもの	35
第3章 大川周明の社会主義	37
(1) 大川周明と『萬朝報』	37
(2) 大川周明と日露戦争	38
(3) 大川周明と『平民新聞』	39
(4) 大川周明の社会主義認識の特質	41
おわりに	45

はじめに

本稿のねらい、および意義

竹内好が大川研究の不人気を嘆いたアジア経済研究所の講演から四十数年¹。今では、橋川文三氏や大塚健洋氏の基礎研究をもとに、大川の思想や行動に関する多くの研究が蓄積され、もはや不人気と言えないところに大川研究はあると言える。最近の研究では、2001年のアメリカ同時多発テロ以来のイスラーム圏への関心の高まりを受け、大川のイスラームに関する論考が目立つ²。また佐藤優氏のように、現代日本がアメリカとどう向き合っていくべきかという問題を大川の欧米観や植民地研究から解釈しようとする動きもある³。そして、2007年は大川没後50年という節目の年ということもあり、大川関連の著作が立て続けに出版された。まず、大川の近代中国認識と具体的な行動を明らかにした呉懷中氏による『大川周明と近代中国』⁴、そして研究者の間では幻の原稿とされていた、大川による頭山満伝『頭山満と近代日本』⁵、最後に関岡英之氏の『大川周明の大アジア主義』⁶である。

だがこうした「活況」は、大川が一連の著作や論考の発表を通じて、現実政治に影響を及ぼすようになる壮年期に集中しており、青年期の大川の思想や行動については、壮年期における具体的行動につながる「源流」でありながら、これまであまり顧みられることがなかった。青年大川は、毎週教会に通って聖書にふれ、『週刊平民新聞』（以下、『平民新聞』）を購読し、自らを社会主義者と称するなど、後年に「超国家主義者」「右翼」といわれた人物としては、異色の経歴があったことが先行研究⁷によって明らかにされている。しかし、大川がふれたそうした教義や思想は如何なるものだったのかが十分に整理されておらず、加えてそれらを当時の大川がどう受容し、後年の大川にどのような影響を与えたのかという点まで論考がなされていない。よって本拙稿では、先行研究で明らかにされた事実に関する具体的な考察を行うことで、思想形成期の大川が抱いた社会主義思想は如何なるものなのか、それが後年の大川の思想や

行動にどのような影響を与えたのか、という二点を明らかにすることを試みたい。

ある人物の思想を理解しようとすれば、思想形成がなされる青年期（一般的な定義は14、5歳から24、5歳）の言行にまでさかのぼって考察することが重要であるが、特に大川の場合は、ここで形成された思想が生涯を通じて一貫しており⁸、通常の青年期研究以上の重要性をもつ。

論の進め方であるが、まず第1章では、大川が青年期を過ごした明治中期の時代背景を確認する作業から始めたい。ここでは近代化と社会問題の中から生まれた社会主義が、どのような時代的特質を有していたのかを代表的な明治社会主義者を取り上げるなどして論じる。

第2章においては、大川が社会主義よりも先に影響を受けたキリスト教の内容と大川の反応を明らかにした上で、キリスト教と社会主義の両者の関係がどのようなものであったかを論じる。

そして、第3章では大川が触れた社会主義について論じる。前章で明らかになったことをふまえ、他の社会主義者には見られない大川の社会主義認識の特質を明らかにする。

そして最後に、青年期に抱いた社会主義思想が、のちの彼の思想や行動にどのような影響を与えているのかを論じて結びに代えたい。

尚、本稿では、中学時代の大川を知るための手がかりとして、特に第2章以下で『大川周明日記』を中心に用いた。この日記は、明治36年2月2日の中学4年のときに始まり、明治36年3月から8月までと、明治37年3月、5月の欠落を間に挟むも、同年6月27日までの彼の日常生活や思索の跡を知ることが出来る。この間の大川は、荘内中学校を卒業後、9月の高等学校入学までの3ヶ月間を東京の正則英語学校（現在の正則学園高等学校）に学んでいる⁹。なお、これ以後の熊本五高時代の日記は発見されておらず、日記が再開されるのは大正10年10月5日からである。

第1章 青年大川周明が過ごした明治中期の日本社会

(1) 近代化と明治青年

明治中期に生まれた大川周明(1886-1957)のような世代は、当時「煩悶青年」と呼ばれ、それまでの世代とは異なった心性を持っていたとされている¹⁰。大川と同年に生まれた一高生、藤村操が「巖頭之感」を残して華嚴滝に投身自殺したのも1903(明治36)年のことであり、世代間の心理の変調を示す事例としてあげられるだろう。

こうした青年層の心理的背景には、当時の日本が直面していた内外の急激な変化があった。その一つが官僚制機構の整備と立憲体制の確立である。これが社会的上昇の流動性を次第に減少させ、それまでの「立身出世」や「成功」という価値体系の実現を阻むようになったために、「正当とされた価値体系と社会生活の現実の背馳から生じるアノミー」から、「進学や職業選択の失敗が単に貧困や期待可能利益の喪失以上に強い心理的衝撃」を当時の青年層は受けたため、或る者は自ら命を絶ち、また或る者はデカダンスに走ったのだ¹¹。

次に、近代日本が初めて経験した日清・日露戦争の影響があげられる。これら戦争に勝利した結果、日本は植民地を有する帝国主義国家となった。橋川文三氏はこうした帝国主義的国際社会に日本が仲間入りするという状況の中で、青年たちに「非常に素朴な形ではあるが、西欧帝国主義に対する微妙な憧れと反撥の思考様式が見られ、不安と期待ともいうべき心情」¹²が持たれるようになったと指摘する。

そして最後に、この時代は日本資本主義の成立期であった。明治14年の政変後に大蔵卿に就いた松方正義が行ったデフレ政策による農民層分解と資本の原始的蓄積によって、1880年代の後半に産業革命が始まり、急激な勢いで貧富の格差が広がった。こうした中で発生した貧民の存在が、社会問題として特に青年層に意識されるようになったのが、明治中期の日本であった。

このような変化の時代のなかで多くの青年は、

人生の意義や自己と社会の関係など、人生論的煩悶を抱いていた。同時代を生きた大川とて例外でなく、こうした時代精神のなかで煩悶しながら¹³自我の目覚めを経験し、人格の完成を目指したのである。

(2) 初期社会主義

明治中期の社会において、貧困が「問題」として広く認識されるようになると、さらにすすんでこれを改良、解決すべきものとして、有志による研究会が開かれたり、結社がつくられたりという動きがみられるようになる。これが日本における社会主義運動史の始まりである¹⁴。

「社会主義」という語句を用いる上で留意しなければならないのは、時代によってこの用語の持つ意味合いが大きく違ってくるという点である。よって本論に入る前提として、大川が触れたこの時代の社会主義の特徴を確認しておきたい。

世代的に大川は、黎明期の社会主義に触れていることになるが、この初期社会主義に特徴的なのは、キリスト教とほとんど不可分の関係であったということである。

1898年に結成された社会主義研究会の母体は、プロテスタント系で三位一体説など聖書の非科学的な教義に反対するユニテリアン協会で、当時協会の影響が強かった『六合雑誌』において盛んに社会主義がとりあげられた。また、こののち結成される社会民主党の創設者6名のうち、幸徳秋水を除く片山潜、安部磯雄、木下尚江、西川光二郎、河上清がクリスチャンであり、理想綱領第一条に「人類同胞主義」を掲げている点にもキリスト教精神がはっきりとみとれる¹⁵。

このような、キリスト教団体が社会主義団体も兼ねる、あるいはクリスチャンが社会主義者も兼ねるという現象がみられたのは、社会主義が我が国に根付くために「キリスト的発想」を必要としたからであった。社会主義運動は、貧困に苦しむ者の間から起こるものではなく、それを外から「問題」としてとらえる知識階級から始まるものである。そうした初発の段階で運動者側に必要と

なるものは、利害関係のない他人のために自分を犠牲にするという市民社会的な発想である。ところが、こうした発想は伝統的日本社会には存在せず、貧乏や病気は前世の因縁か祟りと考えられ、これらに苦しむ人のために個人的な利益や共同体の利益を犠牲にするなどということは、およそ考えられないことであった¹⁶。それを看過できぬものと意識されるようになったのは、「隣人愛」「博愛」というような発想を持つキリスト教による人間観についての価値の転換があったからであり、社会主義の萌芽もこうしたキリスト教による土壌づくりがあってはじめて可能となったのである¹⁷。よって、この発想をキリスト教的教義から会得していた初期社会主義者たちは、「貧困は問題であり、それは救済すべきことである」という倫理規範を個々人に涵養することを社会主義運動の前提として始めなければならず、ゆえに初期社会主義は多分に説教的、啓蒙的、教育的であるのが特徴であった。社会主義研究会・社会主義協会の会長を務めた村井知至の「社会主義は則ち非個人主義なり、現今の社会を支配せる私心私欲に基づく個人主義に反抗し社会全体の福利を計図する公共的精神の発露なり」¹⁸。あるいは、「社会主義は人情の大義を重んじ、人々相愛の大道を行わんことを期す、社会主義は実に人情主義ヒューマニズムを以て根本的動念となせるなり」¹⁹という主張からもわかるように、初期社会主義にとっての最初の課題は、社会全体の利益よりも自分一人の利益や、共同体の利益を優先する「個人主義」の克服だったのである。

このように、社会主義はキリスト教的ヒューマニズムを媒介として日本社会へ浸潤していくわけだが、ではキリスト教社会主義者たちは、社会主義とキリスト教の関係をどのように認識していたのだろうか。安部磯雄は、「基督教は人類の精神的方面に解決を与えることが出来るけれども、物質的方面の幸福を与えることは出来ない。勿論基督教は精神的方面の解決さえ出来れば自然に物質的方面の解決も出来ると説くのであるけれども、実際の事実は決してこれを証明しない。（中略）則ち精神生活は宗教により、物質生活は経済学に

よって指導さるべきものであるという結論に達した。』²⁰と述べているように、キリスト教は精神的救済、社会主義は経済的救済をするものとして、両者の役割をそれぞれ別立てで把握している。そして晩年には、人間には精神生活が目的であって、物質生活はその手段に過ぎなく、ゆえに社会主義は精神生活の手段であるとも述べている²¹。木下尚江も「余は四海同胞主義の熱心なる信者となりしも生存競争の地上の悲劇は、神学の解釈すべきところに非ず、天地の矛盾は新たに発見せられて心中の煩悶殆ど明状すべからざりしものありき、之を慰藉したるものは則ち社会主義の経済論なり」²²と語っており、安部と認識をほぼ同じくしていたことがわかる。このように、キリスト教社会主義者らには、社会主義とキリスト教が社会問題を解決する上で補完関係を成すものと認識されていたのである。両者が共存共立し得たのは、我が国においてマルクス主義について本格的な学究が始まっておらず、互いの矛盾や相克が顕現化しなかったためであった。やがてこれが顕わになるや、社会主義側からキリスト教を徹底的に排除しようとする動きが起こり、これに直面したキリスト教社会主義者らは、棄教して社会主義への道を進む片山潜のような人物と、あくまで信仰にこだわり続け社会主義と袂を分かった安部や木下のような人物とに、両極分解するのである。

第2章 太田周明とキリスト教

(1) キリストとの出会い

太田と社会主義との出会いは、おそらくは郷里の酒田にほど近い鶴岡の荘内中学校に通っていた頃のことであり（1899年4月～1904年3月）、こうした初期社会主義の叢生と符合する。しかし、太田が社会主義を知るきっかけが、どのようなものだったのかまでは明らかにすることは出来ない。太田とキリストの出会いについては、『安楽の門』において「私は中学校の三年生の時から、郷里鶴岡天主教会に聖職を奉じて居たマトン神父について、毎週三回フランス語を勉強した」²³と回顧し

ているのだが、社会主義との出会いに関することは後年になっても語ることはなかった。ただ大川は、著書『日本精神研究』の「はしがき」において自己の精神遍歴を回想する中で、自分は最初にキリスト教に触れ、それから「マルクスを仰いで吾が師とした」と語っているから²⁴、順序としてはキリスト教のあとに社会主義と出会ったと考えてよいだろう。

ならば大川も、これまでみてきた明治社会主義者のように、キリスト教を通じて社会主義と出会ったのか。大川は語学習得を目的として通った教会で「自分に注がれた神父の深い慈愛に心動かされて、いつとはなく基督教に心惹かれ、自ら進んで聖書を繙くようになった」。そして彼は聖書を通じて宗教的な目覚めを経験した。だが彼は、キリスト教徒になることはなかった。それは、のちに彼自身も語っているように、キリスト教の教義に納得いかないところがあり、それを「そっくり其儘自分の信仰とすることが出来」なかったからであった。しかしこの出会いによって彼は、キリスト教という一つの既成宗教への関心を越えた、宗教の本質を知ることへ関心を向けるようになる。よって大川の社会主義理解を考えると、キリスト教との連続性は普遍的な宗教の中にある既成宗教の一つとしてならあるだろうが、キリスト教からの直接的な連続性というのはなかったと判断できよう。

こうした普遍的な宗教への関心を持った大川は、他の社会主義者には見られない独特な社会主義理解を示す。次節ではこうしたオリジナリティを理解するために、大川がキリスト教の如何なる点に不満を抱いたのかを明らかにする。

(2) 大川周明のキリスト教認識

大川はキリスト教に対して三つの不満を抱いていた。一つが、教会制度や儀礼など外面的要素。二つ目に、キリスト教にある「奇蹟」や「復活」のような非合理的な教義。そして最後に、人生において精神的生活の充実を志向した大川だったが、キリスト教が来世の救済を説くばかりで、現世に

おいて精神的生活にすら到達できないほど貧困に苦しむ人々がいることに無頓着な点である。本節では、このうち最初の二つについて取り上げ、残りの一つは、次節において論ずる。

まず一つ目の不満であるが、特に中学時代の大川にとっては、キリスト教そのものではなく、専らカトリックに向けられており、対するプロテスタントを好意的に見ているのである。明治36年9月23日の日記に書かれたマトン神父とのカトリックとプロテスタントとの違いについての問答からは、そうした片鱗を窺わせる。

六時半頃よりマトン先生を訪うて種々の話を承った。神の存在。基督教と云うのは何であるか。何を訓へるものであるか。新教と天主教との差異。羅馬法王の話に就いて先生が語られたが都崎先生の云ふのと矛盾する点が多い。

都崎先生は新教はルーテルが天主教の腐敗を概して新にプロテスタントを創めたので新教は天主教の改良したものだと云ふてルーテルを大に称揚するがマトン先生はルーテルの傲慢なる性質が法王の為に罰せられたのをふくんで新教を建て擅に聖書の意義を解釈して己れの不徳を曲弁するのだと云はれ新教は宗教とするの価値がないのだと曰われた。併しこれはいくら我田引水の論ではあるまいか。余が心から偉い人間だと思ふて居る内村鑑三先生なども新教徒であるのに。

大川が内村鑑三を尊敬しているというのは興味深い。彼が直接内村の無教会主義に対して言及した箇所は、日記やその後の著作にも確認することは出来ないが、内村を語る上で無教会主義は避けることのできないものであるから、おそらくは内村の無教会主義についてある程度の知識は持っていたと考えられるだろう。

大川の「内村熱」はのちの日記にも見て取れる。明治36年11月3日から内村の『地人論』を読み、それを15日まで「撮録」(手写)し、翌37年1月15日には『求安録』を買い求め、予備校生として東

京暮らしをしていた同37年6月20日には「内村独立清談」に出かけたことが確認できる。そしてその二日後に、神田教会（カトリック）に島貫平太夫の説教を聞きに行くつもりだったが、やめて内村の『Great Men and Reading（偉人と読書）』を読んでいる。

また大川は、内村と同じく札幌バンドの構成員であった新渡戸稲造にも注目していたようで、10月19日に新渡戸の『農業本論』を読み始めるが、「農業本論趣味いよいよ深い」（10.22）、「再読しよう。する価値があるのだ。」（10.26）、「農業本論を撮録した」（10.27－11.11）と感銘を受けた様子で、年が明けて2月5日には新渡戸の『今世風の教育』を手写している。

また日付が前後するが、プロテスタント系で伝道師養成のための聖学院神学校（聖学院大学の前身）の設立に尽力した石川角次郎、宮崎八百吉が「学生募集と基教伝導と東北各地教状視察」²⁵のために鶴岡を訪れ、4夜連続の演説を行った。大川はそのすべてに足を運んでおり（36.9.10－13）、各講演の要約を日記に残している。大川が残したそれによると、全講演の題目は、「来たりて見よ」「釈迦非仏陀」「教育の精神」「耶仏比較論」「汎神論」「大死論」「真正の宗教」「更正論」で、仏教との比較を以てキリスト教の教義を紹介していたようである。大川が講演に対して具体的にどのような感想を抱いたのかを知ることは出来ぬが、12日（土）の日記に、「明日は日曜なれば之を利用し氏の講演によりて得たる感想を□せん（おそらく「誌」が入るだろう）」とあり、翌13日（日）には「石川先生演説感を誌す。張（帳）面を作り名づけて感想録という爾来思ふことあるごとに之に誌さん。心の日記なり」とあるから、日記の要約とは別にノートを作るくらいの感銘を大川は得ていたことがわかる。明治36年9月29日の項には「夜修養項につき感想録に記入す」とあるから、継続的にこの「心の日記」が書かれていたようだ²⁶。

この講演が終了した次の日（36.9.15）、大川はフランス語の勉強のために天主公教会を訪れるが、そこでマトン神父が秋田に転任したことを知る。

週に三度も顔を合わせていたマトン神父が、何も告げずに転任したのには何か事情があるのかも知れないが、この時期に天主堂の建設が始まり、11月までフランス語の学習を休むことになる。そして、大川が再び天主公教会を訪れたのが10月12日。日付から推察するに、天主堂の献堂を記念して講演が行われることとなったのだろう。その日のことが日記に残されている。

夜今野君と共に天主堂に演説を聞きに行った。六時より始まるのだと心得て早く出掛けた所七時より始まるので一時間余り無駄に費やした。漸く時が来ると新築の堂へ喧囂雑沓を極めてはいった。見ると第一予をびっくりさせたのは床に畳を敷いて居ることである。堂の内部ががやがや装飾しているけれどまるで小刀細工だ。奥の方などよくは判らなかったけれど仏教臭さくて頗る嫌厭の感を起させた。三十分許り祈祷の様なものを朗読した。これも和尚の読経と節までが似ている。時々信徒がたがAmenとかなんとか合唱するのも南無阿弥陀仏と念ずるように聞こえる。予は、天主教が天正時代に頗る蔓延したのもこの儀式が仏教のそれと類似して居る点が多いかただろうと思ふた。新教の教会に行くと牧師が跪いて天に祈りを捧げて吾等の父よと呼ぶのを聞くとなんとなく、異様な気持ちになって、神々しいような気を生ずるが、この方ではなんとなく、儀式的外面的のように思はるる。

この天主堂はバジリカ型三廊式とよばれる造りで、設計は佐渡の両津教会や京都の旧聖ザビエル教会など日本の教会堂を数多く手がけたパピノ神父によるもので、1979年には国の重要文化財に指定されている²⁷。旧庄内藩家老の末松家の屋敷を改造したそれまでの教会に通っていた大川にとって、おそらくこれが初めて目にするキリスト教的な建造物だったのであろう。しかし大川はこれに感動するどころか、天主堂の内装は「小刀細工」であると一蹴し、天主教の信仰様式それ自体をも仏教

のようなものと見て嫌悪する。大川にとってカトリックの施設、教義は「儀式的外面的」と捉えられ、対する新教は「神々しい」と感じられているのである。「肉に生きること」より「霊に生きること」を説く神父が「仮住まい」であるはずのこの世において荘厳な天主堂を建造し、そこで悠々と説教をする姿が大川には滑稽に見えたのかもしれない。その点で、洗礼と聖餐のサクラメントがプロテスタントの宗教改革が排除しそこねた残滓であるにとらえ、これをも排除して宗教改革を完成させることを主張する内村鑑三は²⁸、大川の不満要素を実践によって改めていこうとした人物であり、それ故に尊敬の対象となったと考えられるだろう。

これに関連して、明治36年12月2日の日記には、「仏語を聞き終わってから先生に宗教のことを質問して先生からリギョル氏の教会に於ける権利主義と自由主義という本を借りて来て見た。面白い現象もあればあるものだ。頭から終まで新教の讒謗で否な批難で満ちて居る。ここが世の中であらう。」とある。大川の質問した「宗教のこと」がいったい何であったが定かではないが、もしエルベ神父が貸してよこした書籍が、それへの回答としての意味を持つならば、おそらく以前マトン神父に問うた「新教と天主教の差異」だったのではないだろうか。

以上みてきたように、大川はキリスト教を見るとき、カトリックへは否定的な見解を示したが、対蹠的に新教を「神々しい」と評したり、内村鑑三を支持したりと好意的であった。こうしたキリスト教＝プロテスタントへの関心は、大川の行動を規定する一因子として働くようになる。例えば大川は、明治37年1月28日の日記に、「青山學院に入校せんかとの希望起これり。然れとも確固たるものにあらず。」と書いている。これは1903（明治36）年3月27日に勅令61号として発令された専門学校令に基づいて、青山学院に高等科が設置（1904年2月）されたのを受けての希望であろう。青山学院はプロテスタント・メソジスト派のミッションスクールであり、そうした環境が大川に漠

然とした希望を抱かせたのではないかと推測できる。

また大川は、熊本五高入学後にキリスト教関係者との親交を多く持つが、従来の研究ではカトリック教会の神父の影響によって開眼された聖書・キリスト教への関心と、プロテスタント発祥の地の一つである熊本における行動との連続性が、単にキリスト教と一括りにされ説明されるにとどまり曖昧なままであったが、先述したカトリックへの疑義と、それに伴って大きくなったプロテスタントへの憧憬が、その説明として説得力を持つだろう。

次に、大川が納得しなかった信仰と合理性の問題についてであるが、大川は晩年に自身がキリスト教徒にならなかったことについて以下のように語る。

多年に亘りて深く信仰の根を下ろしているヨーロッパに於いてさへ、在来の救済観、キリストを神とする教義、三位一体論、贖罪及び犠牲観、奇蹟、古い天啓観などは、決してキリスト教の最後の根柢でなく、進化の波に洗い去らるべき衣裳に過ぎぬと力説されているときに、何らの先入主無くして新たにキリスト教に接する青年にとりて、これらの信仰を其俤に受け入れることは不可能である。一切の外面的要素を取り除いた跡に、イエス自身の純一平明な福音が残る。そして福音そのものの中にも内面的部分と外面的部分とがある。而も外部の覆面に蔽われながら、福音の至醇な内面の光輝は到る処を照らして居る。若しキリスト教がこの至極の一大事を忘れ、在来の信仰や儀礼にあくまで執着するならば、仏教の場合が然る如く、恐らく知識人の宗教的欲求を満足させぬであらう。²⁹

1873（明治6）年にキリシタン禁制の高札が撤去されて、我が国へのキリスト教の移入が本格的に始まるが、そこで移植されたミッション教会が直面したのが、日本人の西洋の制度や儀礼や教義を伴わない「純粹」で「靈的」なイエスの宗教へ

のあこがれであった³⁰。太田も同じく、聖書による救済の教えは歓迎したが、それに付随した外面的規範に不満を抱いていたのである。

ところで、太田が納得いかなかったと思われる非合理的教義については、キリスト教内部においても問題意識を持つ勢力があった。ユニテリアン協会などに代表される自由主義神学（新神学）は、近代的人本主義、合理主義にもとづき、進化論や歴史的批評的方法によってそれまで伝統的に信じられてきたキリストの受肉や三位一体説を否定した反正統的神学思想であり³¹、この時代の教会指導者の多くもこうした新神学に同情的であった。

こうした明治中期のキリスト教内部における福音の本質をめぐる動揺の中から、新神学的な風潮に抗って、教会を社会から切り離して信仰の純粋性を保持しようとする植村正久のような人物があらわれ、その一方で、より積極的に社会との関わりを志向し、キリスト教の教義を人間の内面に留めておくだけでなく、実践的な運動を通じて社会を改良し、「地上における天国の建設」を目指す木下尚江のような社会主義者も現れるのである。太田は洗礼こそ受けなかったが、新神学がもたらした自由主義的な雰囲気の中でキリスト教に触れたという点は、社会主義との関係を考える上で重要であろう。

（3）宗教と社会主義を架橋するもの

太田は自叙伝で、自分は洗礼を受けなかったが聖書を通じて宗教的な目覚めを経験し、「真剣に世界とは何か、人生とは何か、如何に世界と人生とに処すべきかを考えるようになった。私は少年時代から読書が好きであった。それは少年の飢え渇くやうな知識欲を満たすためであった。然るに今や世界や人生についての問題が、単純な知識欲からではなく、謂はば全人的欲求として私に迫ってきた。そのため私は中学の五年生の時に、大学では哲学を修める決心を極めた」³²と述べている。ここ太田の言う「世界」とは、社会と言い換えてよいだろう。自分は社会とどのように関わっていくべきなのか、社会の一員として自分が担うべく

役割は如何なるものか、そうしたことに若き太田は煩悶したのである。橋川文三はこの時期の青年の心理に生じた「一種不思議な二重志向」として、「世俗への志向」と「自我への志向」との分裂を指摘しているが³³、当時の青年の多くは、社会における矛盾をよそに立身出世を志向する者を蔑視し、自分自身の人生の問題を社会におこる種々の問題の中で捉え、人生の意義を社会との関わりの中に見つけていこうとした。太田はキリスト教徒にならなかったけれども、その出会いが自我を呼び覚まし、社会の矛盾とそこから起こる諸問題を発見させる契機となり、そして彼を社会主義にめぐり合わせたのだった。

太田は『日本精神研究』のはしがきにおいて、社会主義との出会いをこう述べる。自我に目覚めた太田は、人格の完成を目指して「先賢古聖を思慕し、彼等の辿れる登高の一路を予もまた辿りて、親ら精神的の高嶺の絶頂を摩すべく、実に勇躍して郷閭を辞した」が、「予は小禍に頓挫し、微憂に懊悩して、救を基督に求め」る。彼は「此教に力を得て、幾多の難関を事もなく」こなすことができたが、ある時、キリスト教の矛盾や限界に気がつく。そこで出会ったのが社会主義である。

登山半ばにして予は越しかたを振り返り、山の麓に遑々如として奔馳する多くの人々あるを見た。而して彼等が更に精神的の高嶺を仰ぎもせず、従って向上登高の志なきを悲しんだ。予は其の重大なる原因が、彼等の貧苦に在るを見、彼等の貧苦の重大なる原因が、制度の欠陥に在るを見た。予は教会の牧師が壇上より肉に死して霊に活きよと説教しつつある間に、予の背後より醵金箱が順次に廻り来るを見て、如何にして斯かる矛盾に平然たり得るかと怪んだ。

予は総じて物質を偏軽する道德の虚偽に憤を發した。名手は鈍刀を撰って鋳尚ほ断つ可し、而も是れ凡夫の企及すべき所でない。現代に於ける黄金の万能は、動かすべくもなき事実であり、宗教と言はず政治と言はず教育と言はず文芸と言はず、世にある総てが黄白の為に左右さ

れるのを目の当りに見て居る者に、財宝を卑むべしと教えたところで何の効果も期待し得るか。仁義五常の道を蹈めと人に迫る者、世の悖徳乱倫を嘆く者は多い。さりながら彼等が言う通りの路を進めば、貧苦の淵に陥るか、又は奸譎譎なる小人の乗ずる所とならねばならぬ。かくて予は社会制度の根本的改造を必要とし、実にマルクスを仰いで吾師とした。³⁴

大川は、「肉に死して霊に活きよ」というように現下の社会問題に諦観をもって臨みながらも「背後より醜金箱」を回して金銭を徴収するという姿勢に、たとえ聖者であっても俗世に生きる以上は物欲から離れがたいという矛盾をみた。そして、前節冒頭において示した三つめの批判が、社会主義へと彼を誘うのである。

大川が求めるものとキリスト教との間に生じた齟齬は、大川とマトン神父の後任のエルベ神父とのやりとりの中にも見て取れる。

不義にして富める者あり、正しくして貧しき者あり、希くは師の説を聴かむ。答へて曰ふ、汝現世を過重する者よ。貧しくて正しきは永遠の生命を得、不義にして富めるは永劫の亡滅に入るを知らずや。現世はこれ試練の場処のみ。富めるを福とする事勿れ、貧しきを禍とする事勿れ。吾等生涯を道に捧げて弘法に焦思する所以のもの、人をして高く物界に超然たらしめて来世の歓楽を享けしめんが為のみ。吾更に問ふ、東洋の賢者、或は貧にして怨なきは難く、富みて驕るなきは易しと云ひ、或は礼儀富足に生じ窃盗究極に起ると云へる者、之を世に徴して多く停る所なし。何が故に人生れながら貧富貴賤の別ある。訓へて曰ふ、神は等しく万人を祝福し給へり、貧富貴賤皆なこれ測り難き神旨に基づくと³⁵。

神父が来世の救済を唱えるばかりで、現世における惨状を何ら顧みない点に大川が不満を抱いている様子がわかる。彼はこの日の出来事を日記に

したためている。曰く、「ああ先生は頑固なる哉。余の神を信ぜんとする心も先生の頑固に依りて打消されんとす」³⁶と。ただ、こうした「現世に重きを置くべからず」という教えは、なにもカトリック教会においてだけではない。大川の尊敬する内村も、社会主義とキリスト教の違いを論ずるなかで³⁷、

第一に基督教は天国の教へでありまして社会主義は此世を改良するための主義であります。此点に於ては基督教は社会主義のみならず、帝国主義、共和主義、帝王主義等総べて此世の経綸を目的として立てられたる主義とは全く違ひます

我等人類も我等の棲息する此地球も遠からずして消え失するものでありますから、我等は此世のことに就ては左程に心配するに及ばないと云ふのが其大体の教義であります、故に使徒達は其時代の奴隷に向つても肉体の自由を得よとは教えませんでした、又奴隷の持主に向つても必ず彼等を放免せよと云ふて迫りませんでした、只奴隷たるも、其持主たるも只一時の事であるから、互に真義を尽し、相欺き相騙る勿れと勧めました

と述べているから、ここで大川が抱いた不満はカトリック、プロテスタントのどちらに向かったとしても解決できるものではなかった。大川が晩年に若き日の自分をこう語る。「宗教的に目覚め」た自分が「霊性の渇きを癒やそうとした」とき、キリスト教には「何分『馬鹿らしき事』が多く思はれ」「そして其の『馬鹿らしき事』が信仰の礎だと教へられては尚更納得出来なかった」と³⁸。大川は、外面的儀式や非合理的教義を信仰の本質と説き、貧困によって多数の人間の尊厳が奪われている現実に対して「肉に活きようとするな、霊に活きよ」と繰り返すキリスト教に幻滅した。大川は人生において精神的生活の充実を重視する。しかしそうした内面世界の充実は、経済的安定があ

ってはじめで達成できるものである。よって大川は、多くの貧しい人々が「霊に生き」られるようにするために、まず「肉に生き」られる社会に改めること、つまり社会主義体制を目指すようになるのである。

前章において、安部磯雄と木下尚江が社会主義者となるのにキリスト教が果たした役割を述べたが、大川の場合は、順序こそ同じでもキリスト教が果たした役割は異なったものであった。前二人はキリスト教の教義を有しつつ、そこから自由神学的発想をもって社会主義者となったが、大川は社会主義者になるにあたってキリスト教の教義を必要としなかった。なぜなら、幕末から明治にかけて生まれた安部や木下のような初期社会主義第一世代と、大川のような第二世代で社会主義受容のプロセスが異なるからである。一般に、第二世代は先代が暗中模索の中で獲得していった各種知識を、彼等の啓蒙活動などを通じて体系立った形で吸収することが出来る。安部においては、「私は基督教の人道主義によって将来社会主義者となるべき素地を与えられて居た。然るに今や社会事業が貧乏撲滅の方法として不十分であることを覚った私は最早一歩で社会主義の領土に踏み入るといふ所まで進んで居たのだ。」³⁹と語っているように、社会主義の前提として必要な、伝統的日本社会における人間観の転換をキリスト教の人道主義に頼った。しかし大川が社会主義を体得するにあたっては、例えば『萬朝報』や『毎日新聞』や『六合雑誌』などで筆を持つ第一世代から間接的に受容できたため、人道主義の涵養を直接的に聖書や神父・牧師の説法に頼る必要がなかったのである。

キリスト教によって伝統的人間観の一大転換を自己内で経験した安部や木下にとって、キリスト教という存在は容易に取り除けるものではなかった。しかし大川においては、そのような拘束力が弱かった分、キリスト教に対して客観的な姿勢をとることが可能となった。その結果キリスト教が逆説的に理解され、それが宗教そのものへの関心を惹起し、やがて社会主義へ接続するのである。

第3章 大川周明の社会主義

(1) 大川周明と『萬朝報』

前章末では、大川が社会主義第一世代の文筆活動に影響を受けうる立場にあったことを述べたが、本節ではそうしたもののうち、大川が購読した『萬朝報』についてとりあげたい。

『萬朝報』とは1892年に黒岩涙香が「一に簡単、二に明瞭、三に痛快」を編集方針に、東京で創刊した日刊紙で、「名士妾しらべ」のような三面記事が呼びものとなって主に下層階層に支持された⁴⁰。こうした被支配者側に立って支配者層の不正や裏面を暴き攻撃するような任侠の気風が編集方針には貫かれており、日々の暮らしの鬱憤を上層批判で昇華できる新聞であったという点が、多くの下層読者を獲得できた所以であろう。そして黒岩は、読者層を上層へと広げるために、1899年頃から内村鑑三や幸徳秋水、堺利彦など当代きっての思想家や宗教家などを続々入社させ、黒岩自身も翻訳小説だけでなく『天人論』に代表されるような人生哲学を紙面で手がけるようになり、「都下のみにても上は紳士紳商と称せらるるものより下は車夫馬丁の類に至るまで、多少の文字あるものにして殆んど之を読まざるものなし」⁴¹といわれるほど読者層は広がった。こうした黒岩の人生論、進歩的思想家・宗教家による理想団運動などに加え、英語を学ぶ格好の教材と言われた英文欄、安価な紙価などの特色が「内観的煩悶時代」を生きる青年たちからも熱烈に支持された。

だが読者層が広がったからといって紙面が穏やかになることはなく、三面記事がメインであった頃の任侠の気風が全体にも生きており、こうした社会批判がやがて社会主義へと発展し、多くの青年読者層に影響を与えた。『平民新聞』の発刊以前において『萬朝報』は、種々の魅力を以て学生を取り込み、彼らに社会意識を涵養したことは、初期社会主義史において重要であろう。

『平民新聞』の「予は如何にして社会主義者となりし乎」を分析した中村勝範氏の研究によれば⁴²、初期社会主義者が社会主義者となるに影響を

あたえたものは、全回答者82名、回答数152（複数回答）のうち「読書」（新聞・雑誌含）が49と圧倒的で、そうした読者がいかなるものを読んでいたかという、全回答数96のうち、上位から『社会主義神髓』幸徳著19、『萬朝報』10、『新社会』矢野文雄著7、『社会問題解釈法』安部磯雄著7、というように、初期社会主義において『萬朝報』が果たした役割が少なくないことが明らかである。

当時横須賀海軍造船工廠の木工部見習職工であった荒畑寒村は、日給25銭の薄給で内村鑑三の文章に接したいばかりに『萬朝報』を購読し、やがて堺利彦や幸徳秋水らの社会主義的論評に心をひかれ『社会主義神髓』を読み、おぼろげながら社会主義の概念を得、『萬朝報』の主戦論への転向に抗議して退社した幸徳、堺に感激して社会主義者となる志を立てた⁴³。また、文学者、史論家で平民社同人の白柳秀湖は「黒岩周六氏の『萬朝報』などをよんで少年の血をわかすことを教へられた。弱者の味方をして強者の横暴を挫き、その社会悪を評発するといふような生活が男子としてどんなに生き甲斐のある生活であるかと言ったやうなことを考へるやうになって来た」⁴⁴と回想している。荒畑や白柳のような日本社会主義運動における謂わば二世代が、『萬朝報』で開眼され、『平民新聞』で社会主義思想の薫陶を受けるという道筋を辿った点は、大川にも共通するところである。

大川日記には、明治36年10月6、7日、同年12月16日、同年12月19日、同年12月21、23日、明治37年1月9日、同年1月15日、同年2月24日、同年4月3日に『萬朝報』を読んだということが書かれているので、彼がこの新聞を購読していたと考えて間違いない。大川は『平民新聞』購読以前から、『萬朝報』の社会主義的な言説に触れていたのである。

大川は『萬朝報』の発行元である朝報社の各種出版物にも触れている。まず『朝報社有志講演集』の第3、第4集を明治36年9月4日から6日にかけて読み、同年10月10日には第5集を、同年11月には第1集を借りて読んでいる。第3、第4集に関しては題目まで書かれており、「心の修練」黒

岩涙香、「宗教時代の到来」「自由伝導と自由政治」内村鑑三、「社会主義の話」幸徳秋水を読んだとある（36.9.30）。また幸徳秋水の『社会主義神髓』も12月23日に手に入れて、翌年1月30日には「撮要」までしている。そしてこの日の日記には、「余は一層熟考の上社会主義の是非を決定せんとす。兎に角十分の好意を持ってこの主義に対するものなり」と述べられており、『平民新聞』の創刊によって活況をみせはじめた社会主義的な思潮とともに、大川も社会主義への関心を深めていったことがわかる。

（2）大川周明と日露戦争

大川は、開戦直前まで非戦の論陣を張っていた『萬朝報』や、同紙の主戦論への転向から生まれた『平民新聞』を購読していたが、「日露開戦近きにあらんとす。余は之を以て正当なる防衛と認む。人に対しては礼を以てせよ。小鳥に対しては憐を以てせよ。虎狼に対しては即ち威を用ゐよ、武を用ゐよ。余は開戦を主張す」と明治37年1月13日の日記で述べているように、日露開戦には賛成の立場をとっていた。他にも、開戦当初の戦勝報道に歓喜する姿が日記から確認できる。

“旅順口に於て吾水雷艇露国甲鐵艦二巡羊艦一を撃沈せり” “吾軍仁川を封鎖し敵艦二隻吾掌中にあり” との鶴岡新聞の号外出づ。果して事実なりとせば愉快の極なる哉。（37.2.10）

“宣戦の詔勅本日午前一時發布せられたり” “旅順に於て撃戦あり吾艦二隻損傷を受け敵艦十一隻を撃沈せり” との電報来る。後者にして真なりとせば驚くべき哉。日本は終に世界の戦争国なる哉。（37.2.11）

旅順付近にて敵艦四隻を撃沈せりとの報ありしが更に函館付近に於て露艦三隻撃沈せられたりとの報あり。Oh! What a victory!（37.2.12）

また明治36年12月18日の日記には、「名優河野

廣中と題する銀月の文奇矯野弊有るも例の如く面白し。毎日の新聞河野を頌せざるなし。」とある。対露国論の喚起のために結成された対露同志会の構成員である河野廣中は、当時第10代衆議院議長でもあり、衆議院開院式において対露強硬の立場から桂内閣弾劾の勅語奉答文を提出し、12月11日に解散となる事態となった（いわゆる勅語奉答文事件）。連日の河野賞賛の報道はこうした出来事をうけてのものであろう。

これら大川自身の記述から判断すれば、彼が主戦論者であったことは明らかであろう。では、大川が主戦論を主唱するまでに影響を与えた要因は何だったのか。日記からはそうした、彼を主戦たらしめるものを発見することはできない。むしろ、探せば探すほど目につくのが、当時の大川を取り巻く「非戦的」なるものである。

例えば、大川が心から尊敬するという内村鑑三は、キリスト教の立場から日露戦争に際して非戦を唱え続けたが、新渡戸稲造も同じく戦争には反対であった。そのことを知った大川は「新渡戸先生も絶対的非戦主義者なるを知れり。」(37.1.30)と日記に書いている。この「も」というのは、内村鑑三を指すのかもしれないし、あるいはこの日の日記の前半部分に『社会主義神髄』を撮要したことが述べられているから、幸徳秋水のことを指すのかも知れないが、どちらにしても大川は新渡戸、内村ないし幸徳の著作を手に入れているから、直接的にであれ、間接的にであれ彼らの非戦の主張を目にしているだろう。また大川は、住谷天来⁴⁵著「墨子の非戦主義」を読むために『聖書の研究』46号を借りている(37.1.18)。こうした事実から、大川の主張をどのように解釈すべきだろうか。

非戦論には二つの系譜があった。ひとつは「戦争は人を殺すことである。そして人を殺すことは大罪悪である。そして大罪悪を犯して、個人も国家も永久に利益をおさめ得ようはずはない」⁴⁶と内村自身が言うキリスト教的人道主義と結びついたもの。そして、幸徳・堺の「貴族、軍人等の私闘を以てし、国民の多数は其為に犠牲に供せらるる者と為す」戦争への反対を唱えた階級的な反戦論で

ある。このように非戦論はそれぞれの支柱から演繹されたものであった。よってキリスト教的なもの、社会主義的なもの、そのどちらからも感化を受けうる立場にあった当時の大川ならば、そこから派生した非戦論に対して一定の理解を示してもよいはずである。それなのに彼は、日露戦争に賛成の理由を一度だけ日記で触れただけで、非戦論について批判することもなかった。『萬朝報』に幸徳・堺の退社の辞が掲載された10月12日には「新聞を見」とあるから、これを目にしたであろうが、具体的な感想が述べられたりはしていない。

大塚健洋氏は、大川が『平民新聞』の影響下にありながらも主戦論を唱えていたことについて、平民社が掲げた「平民主義」「社会主義」には共鳴したが、北一輝と同じく「平和主義」に同調することがなかったとして、『週刊平民新聞』の平和主義の影響は、過大評価されてはならない⁴⁷と指摘しているが、この説が現段階での資料から判断できる妥当な結論といえるだろう。

(3) 大川周明と『平民新聞』

大川は、11月3日の天長節の祝賀式に出席した帰りに、町に出て『平民新聞』の取り次ぎの手続きをしている⁴⁸。彼は創刊号を「中々面白い」と評し⁴⁹、その後も明治36年12月14日、同年12月22日、明治37年1月13日、同年1月14日、同年2月3日の日記に『平民新聞』を読んだことが記録されていて、第8号から連載がはじまったウィリアム・モリス著『News from Nowhere』（堺利彦訳「理想郷」）については、「ああかかる時代はいつの世にか来らむ。多福なるやこの代に生まれたる人や。」⁵⁰と感想をしたためている。また、東京の予備校に通っていた頃も購読している⁵¹。

大川は『平民新聞』購読の前後から社会主義関連の書籍を読んでいる。明治36年9月30日の日記には「9月中に閲読せる書籍」として、西川光次郎⁵²『社会党』をあげ、堺利彦が家庭の中から社会主義を発展させることを目的に創刊した『家庭雑誌』の6号、9号をそれぞれ読み⁵³、誌上で連載されたエドワード・ベラミー著の社会主義小説

『Looking backward』（「百年後の世界」堺訳）を後に借りて読んでいる⁵⁴。また、小栗貞雄、賀來寛一郎著『社会改良実論』⁵⁵の名も日記にはあがっている。

上京後は、社会主義者の演説にも頻繁に足を運んでいる。『日記』によれば大川は、幸徳秋水、西川光二郎、堺利彦、木下尚江、安部磯雄の演説を聴いていることがわかるが、そのうち安部に感銘を受けたようで、明治37年4月2日に錦輝館で開かれた演説会においては「東都に來りて真に予期せる所と違はざりしは安部磯雄氏の演説のみなりし。実に余を以てせば氏の明晰なる弁と秩序ある論旨とは確かに開會五十年祭に於ける島田三郎の演説より勝ること大なるものなり」と述べ、同月9日に同じく錦輝館で開かれた平民新聞社政談演説会においては「木下尚江氏の演説は未だ本論に入らざる中に中止を命ぜられたり。例に由りて安部磯雄氏の演説は高く群を拔けり。明晰なる其言語と沈着なる其態度と整然たる其論旨とは殆ど余が理想に近きものなり」とも述べ、安部の演説を高く評価している。大川は庄内中学時代から「演説の修練」を心掛けており⁵⁶、「真正の朋友」⁵⁷である本間長一という人物らと討論会を立ち上げていた（のちに会名を「新光会」とし⁵⁸、例えば大川は「協同と競争」⁵⁹という題で演説をしている）。大川はこうした早いうちからの関心事もあって、安部の雄弁術に感服したのだろう。そして注目すべきは安部の「論旨」にも理想を見ているという点である。安部の社会主義論は「精神的救済はキリスト教、物質的な救済は社会主義」というように相互補完的とりあげ方をするのが特徴的であったと前章で述べたが、大川の「精神的救済は宗教で物質的救済は社会主義で」という発想は、こうした安部からの影響とも指摘できるだろう。

以上のように、青年大川は『平民新聞』をはじめ多くの社会主義論に触れていたことがわかる。中村勝範氏は平民社と『平民新聞』の出現がもつ意味を「これが中心となって日本全国の実践的社会主義者を大同団結させ、統一させたことである」⁶⁰と指摘しているが、こうした大同団結が可能

だったのは、社会主義思想に対する十分な研究が進んでいなかったために、社会主義者らが分派行動をとらねばならないほどに原理的立場の相異を認識するに至らなかったからであった⁶¹。言うならば明治社会主義の「社会主義」とは、社会主義的な傾向を内包するものの総称であったのである。

この点に関して松沢弘陽氏も、「社会主義の世界に未だ一義的に公定されたオーソドクシーが形成されない時代だったから、「万国社会党」を範とする「中心人物」のほかに、蘆花が「自家の社会主義を執る」と宣言したように各人各様自己流の社会主義を奉じるものから、社会主義を部分的に支持する者、さらに社会主義には必ずしも共感しなくても社会主義者のパーソナリティや「同志相交」の雰囲気をもって集まるものまで様々だった。そこには後の世代の社会主義像をはみ出さざるを得ぬ、その意味で「意外な姓名」（堺利彦）が多く含まれていた」⁶²と指摘する。

大川の社会主義論をこの松沢説に当てはめると、多分に「自己流」であり「部分的」であることに気づかされる。日本社会主義の史的展開の中でこうした「傍流」の多くは、「主流」に合流するか、別の「主流」に合流していくかするわけだが、大川は種々の流れに多くの影響を受けながらも、何処へも合流することなく「第三の流れ」をすすんだ人物であった。だが明治の斯様な雰囲気の中では、彼もまた社会主義者であったし、そうあることが可能だった。松沢氏は別の箇所「明治の社会主義者に始まり大正の社会主義者も昭和のマルクス主義者も、同じ「社会主義」やそれに結びついた基本的用語を共用しているという事情が「後の世代に属する者に」「明治社会主義の実体を誤解させ」たと指摘するが⁶³、明治期と大正・昭和期の社会主義を区別することなく、『平民新聞』を購読していたという事実を以て大川を社会主義者と見ると、大正以後のそうしたものを否定する側に立つ大川を説明できなくなる。彼の中に「転向」はなかった。彼は後の世代の社会主義像からはみ出さざるを得なくなっただけで、彼自身の主張は一貫していた。彼は周囲の社会主義論が変わ

りゆこうとも、社会主義を目的と捉えず手段としてしか見なかった。以下では、そうした明治期大川の社会主義論の内容とその特質について論じる。

(4) 大川周明の社会主義認識の特質

大川は読書や演説会への参加を通じて社会主義についての造詣を深めていく中で、自身でもいくつかの社会主義論を試みている。その嚆矢となるのが明治37年2月7日に父周賢に宛てた「鼠小僧論」であろう。この中には素朴なちであるが、高校時代に書かれる二つの社会主義論に引き継がれる論理がいくつかみられる。

ところで大川がこの小論を試みるに至った一つの要因には、平民新聞第10号（明治37年1月17日発行）に掲載された西川光二郎の「罪人論」の影響があるかもしれない。大川は同年1月22日の日記で「近日中に吾鼠小僧論を試みんと欲す。行為の動機が利己と愛他とに存するによりて生ずる道德上の問題に亘らんとするなり」と述べており、日付が近いことや内容の近似性が指摘できる。

大川は「鼠小僧論」において、「現今の世の中に於ては、決して絶対なる罪惡と云ふものは」存在せず、「あらゆる罪惡なるものは、或る場合、換言すれば其目的動機の如何によりて或は善たり、或は惡たるもの」であるとする。よって、もしその罪が罰せられるべきならば、罪を犯した「この人ではなくて、これを行わねばならぬようにした社会の罪である」のであって、例えば鼠小僧は、盗みを行ったが目的動機は弱い者を助けるためであるから、悪人とは言えないのだという。世の中には自業自得で貧しい人もいるが、大部分は「自分の精限り働き体力を絞り尽しても、尚且妻は飢に瘦せ子は寒に凍えて居る」人たちで、「彼らは何の教育も」なく「倫理の理の字も徳義のトの字も」知らないから、「自分の天職をも尽すことの出来ぬ」状態である。こうした人々のために「自己の利益を図る為でなくて、まことの愛と云ふ心より」「ありあまる財産の一部を無断に頂戴して、慈善事業に使ってやること」は、断じて悪ではなく、むしろ賞賛すべきものであると述べるのであ

る。

犯罪の発生する原因を社会の貧困に求めるのは、さきに紹介した西川光二郎の「罪人論」や、山川均が囚人体験をふり返って「世の中に犯罪があることも、その犯罪の九分九厘までが、経済上の理由にもとづくものだということも、私は知っていた。（中略）私は、社会主義の始めも終わりの胃の腑の問題だと言った誰からの言葉を、いまさらに思い出さざるをえなかった」⁶⁴と述べていることから明らかなように、社会主義者にとっては自明のこととされていた。大川もこうした論理を取り入れて思想構築をしたことが予想されるが、ここで特筆すべきは、のちに彼が熊本五高において発表する二つの社会主義論に通底する「人間の尊厳」という発想が芽生えている点である。大川は「天職」という語を用いることで、人間にはそれぞれ生まれてきた意味があって、それを全うすることが人生の意義であるということを述べたかったのだろう。その天職を尽くすためには教育を通じて倫理や徳義を身につけねばならないと考える。しかしながら多くの人は、貧しさのために露命を繋ぐことで日々の暮らしが精一杯で、教育が十分に受けられず、よって天職を尽くすことができない状態にあるのだという。

こうした大川の主張の根柢には二つの平等観がある。一つは、彼は少数者が富を独占している状態は不健全であり、例え窃盗のようなことをしてでも富を再分配すべきであるという「結果の平等」である。そしてまだ十分ではないが、貧困が自己実現のために必要な教育という手段へのアプローチを疎外しているという点を指摘していることから「機会の平等」という視点もあったとみることができる。後者がより明らかな形となって大川に要求されるのは、彼が熊本五高へ入学するのを待たねばならないが、こうした平等への要求を中学生の大川が持つに至ったのは、内観的煩悶青年ゆえの強烈な自我志向があったからであろう。大川は、自我の目覚めによって自己を尊い存在であることを認識し、それを他者へ、やがては人類全体へと押し広げて見ていった。そうした意識が高校

時代の論文にははっきりみられるようになるのだが、中学期の大川にもそうした意識がおぼろげながらに生まれていたことを、この「鼠小僧論」は物語っている。

さて、その高校時代に書かれた社会主義論は、実際に執筆された年月は不明だが、一つが熊本五高の『龍南会雑誌』に掲載された「不浄中の真金を如何す可き乎」（第116号、明治39年5月）で、もう一つは『平民新聞』の終刊後にキリスト教社会主義者が中心となって立ち上げた雑誌『新紀元』に寄稿した「吾は個人主義者也故に吾は社会主義者也」（第八号、明治39年6月）である。まず「不浄中の真金を如何す可き乎」の内容から見てみよう。

大川は「一切の衆生は、前人、今人、後人の別ありと雖、等しくこれ天帝の摂理による宇宙究竟の目的の為に存在して、悠遠の過去劫より久遠の未来劫に亘る広大の天工に参与す可き光榮を有する一個尊嚴なる天の子」であると述べ、人間の尊嚴性を高らかに主張する。その際、「瞑思黙想し得たる最初の悟道は、等しく自己の尊嚴是れ也、而して人類の尊貴是れ也」というように、人はまず自己の尊嚴を認識することから始まって、それが他者へ、ひいては人類全体に広げられるものであり、釈迦や孔子やソクラテスやイエスやマホメットにおいてもそうであったと述べる。こうした自我を中心に円弧を広げていこうとする強烈な自我志向は、一連の社会主義論に限らず生涯にわたって彼の思想に通底する特質である。そして、「活動の源泉たる可き人類の思想に対つて、多大なる影響を及ぼせる宗教や道徳や哲学や、乃至は経綸の策画、其形式に於て千種万様なりと雖、悉く人をして其本来の真価値を自覺せしめ、以て其天分を尽くさしめんとするの一点に於て全く一致合同せざるは無し」と述べ、宗教や道徳や哲学は人間の尊嚴を気づかせるものであるとともに、人格を發展させる手段であることを指摘する。しかしながら「万衆」はそのことに気づかない。「聖賢君子」はそれを「飽暖を希求し、権勢に執着し、偏へに物質を重んじて身形を愛する」からだとみ

るが、大川はこれを「物質輕蔑道徳」「心靈偏重道徳」と云って批難する。人間はこの世に生きる以上、「到底經濟的問題を其頭脳より除くことはできなく、基督、孔子、釈迦の諸聖は「自ら貧賤に安んじ、人生を支配する最大の羈絆たる可き、經濟的束縛より脱」することができたけれども、「果して多くの人皆な彼等に倣ひ得可き乎」、「人衆」に「人生の真意義を悟らしめたる後」ならばそれは可能かも知れないが、「蓬髮襤褸跣足の貧者に向ひて、汝は誠に貴き者也と説くも、彼果して言下に肯んすべき乎否乎」と迫る。こうした貧しい人々にとってまず必要なことは「正に尊嚴なる靈性を包む所の体軀を養ふ可き一碗の食」であって、「人生の真意義と云ふが如きは、彼に於てむしろ風する馬牛の觀あれば也」というこの經濟的状況こそを克服する必要があると訴えるのである。

大川は人間の精神を豊かにする「思想」の重要性を認識したからこそ、当代の最大の問題を「依然として道行われず、人覺めざるの一事」とした。これを解決するために大川は、そこへ達するまでの道を遮断する社会の貧困を取り除くべきだと述べるのである。

大川は人生の意義を「自己の尊嚴を自覺して大道を邁進し、天工に参与して人生の真面目を發揮」することだと述べる。しかし人間は「遺伝と境遇と教育との為に最も大なる影響を」受ける。家が貧しく賤しい人の子となり「智徳の闇黒に沈める者」と、富める家の貴き人の子になり「教育を擅まにする者」とでは、「人生の真面目を發揮」するのに難易が生じる。これを解決するためには「社会制度の根本的改革が真に当面の急務なるを感ずる」と大川は主張するのである。「鼠小僧論」において提起された貧困という問題は、ここに具体的な解決の方法を「救世の福音」である社会主義に求めるに至ったのである。

だが社会主義はあくまで人格の發展のための前提であって、大川の目的とするところは「人をして經濟的問題に心を勞することなく、衣食の憂患を其の念頭より除去せしむる事」であり、「古来

聖賢が唱道した策図」と同一なのである。

そして最後に「吾等と共に、現代の制度と称する、悪しき実を結ぶ巨木を倒す事をせずや。革命の斧を揮ふて吾等と共に、一打を其根に加ふる事をせずや。これ聖賢の教訓をして其真意義を発揮せしむる第一歩にして同時に昊天の恩寵と、聖賢の大悲とに答ふる吾人が当然の責務なれば也」と結ぶのである。

この直後出された「吾個人主義者也故に社会主義者也」は、より詳しく人生の目的や、宗教の位置づけなどが述べられており注目される。

大川は、先の論文と同じく「吾の前に吾無く吾の後に吾無し。かくて唯一なる『吾』は、限りなき過去の歴史と限りなき未来の発展とを連続すべき一人のひととして茲に生を天に享けたり。絶大の使命や無限の責任や一度び慈母の胎を出でて呱呱の声をあぐると共に吾が上に置かれぬ。吁、任何ぞ重くして道何ぞ遠き。而も人生是に於て始めて意義あるを見ずや」というように、冒頭において人間の尊厳性を論じる。そして、「人生の究極の理想」を「宇宙の大霊と合致すること」であると述べる。大川は宇宙の大霊を、「之を道と云ひ理と云ひ神と云ひ仏と云ふは人の好む所に委す。而して之を人格視すると否とも亦人の欲する所に任す」と定義する。前論文でいえば「天」がこれにあたるだろうが、こうした発想からこの時期の大川には、特定の宗教を超えた普遍的、メタ的な宗教へ関心があったとみえる。

この宇宙の大霊に合致する、つまり人生の理想に到達するための手段は何か。これを大川は「個性の発展」「自我の実現」だとする。では個性を発展させるためにはどうすればよいか。大川によれば、すべての人間はそれぞれに「大霊」から与えられた「果すべき或る義務を有」しており、「神は世界の各異の事業に従ひて人類の才能を区分し、而して従ふべき業務の異なるに従ひて其性癖嗜好を異ならしめ」ているという、トーマス・ブラウン（Thomas Browne）の言葉をひき、その各々の能力を持って義務を果たすことで個性の発展を遂げることができると主張する。ところで義務の一

つには労働があるが、それは「大霊の命ずる所」であるから、農民、役人、学者の「間に些の優劣なく貴賤」はなく、それぞれが「その努むる所に専念懸命なればここに完全なる個性の発展を遂げて宇宙大霊の一部」となることができるのだという。そして大川は、宇宙の大霊が与えた義務を果たすことが個性の発展をもたらすのだから、人間が個性の発展を志向することは「宇宙の大霊が人類に賦課せる絶対義務」であり、またそれは「大霊と一致合体せん事を憧憬する絶対権利」でもあることを指摘する。畢竟大川は、人間が人生の理想を求め、その実現に向けて努力することは、義務であり同時に権利でもあると主張するのである。

大川は、先に紹介した「鼠小僧論」において「天職」という語を用いているが、このように労働を人生の意義において重要なものとして捉える発想は、早くから触れていた内村鑑三をはじめプロテスタンティズムの影響の他に、彼自身が将来の自分の職業をめぐる経験した煩悶の影響も考えられるだろう。

大川は、宇宙の大霊と合致するために個性の発展の必要性を述べ、そしてその個性の発展のための「最大須要の一事はこれ教育ならざる可からず」と述べる。「子は播かれたりと雖、培ふ事をせずして苗は実を結」ばない、しかし教育に与ることが出来るのは、「之れに要する費用を支出すべき財力を有する少数一部の者にすぎ」ない状況である。「等しくこれ人類也。絶大の使命を有する人類也。宇宙大霊が宿る所の人類也。而して或る者は教育の徳沢に浴し智徳の光明に照らされて自個の発展に大歩する時、或る者は即ち天稟の美德を発揮し得ずして徒らに輻軻零丁の中に終る」という現実到大川は憤りをあらわにする。そして、「彼等と此等と抑も何等の差がある」のか、その理由は「富めるに生れ他は貧しきに生まれたるこのみ」である。「平等は大霊の旨意」であるのだから「経済的の不平等を来し以て悉く社会の平等を没せんとするに非ずや」と悲憤し、貧困の根本的な解決を要求するのである。

大川は、単に社会の大多数の貧しき者を貧困か

ら救うことを要求するのではない。あくまで個人における個性の発展のために、それを疎外する要因としての貧困を根絶することを要求するのである。「社会に於て貧しき者富める者よりも多く労働者は資本家よりも多し。然り而して如是多数の同胞は終に教育の祝福を受くる事なくして智性の闇黒に迷ひ徳性の沈淪に煩えつつあり。彼等の間豈に偉人なしとせんや、俊豪なしとせんや。ただそれ無情なる財の欠乏や彼等をして空しく木石と俱に朽ちしめ了せば、天成の稟賦竟に發揮するに由なし」。大川はこうした個性の発展という個人主義的欲求が各人において行われることで、ひいては人類の発展をもたらすと考える。しかし現下の貧困問題が結果として人類発展を阻止しているという。

大川は個々人がその個性を発達させられる社会組織は、社会主義であると論じる。だがあくまで「吾人は物質を重ず。さはれそは理想を達する手段としての故なり」というように、社会主義は個性の発展のための手段であり前提なのである。

大川は社会主義という福音によって、「真正なる自由と平等を得、ここに十五億の生霊をして悉く意義ある五十年を送らしめん事を欲」し、そして「人類に与ふるに人生の真意義を發揮すべき平等なる助力を以てし久遠の未来劫に於て四海の同胞が真正なる人類時代 (Age of Humanity) を形成するに至るまで不斷の努力を要求するもの也」と結ぶのである。大川はこのように社会主義を国家という枠組みを超えた人類の問題として捉えていた。それは、社会主義的なインターナショナリズムではなく、大川の特徴である普遍的な志向性ゆえのものであろう。

大川 of 社会主義思想の最上位にあるものは「人生の理想」であった。なぜなら大川のこの思想は、一人の人間の「人生とは何か」「この人生をいかにして生きるか」という人生論的煩悶の中から生まれたものだったからだ。竹内好は、若き日の大川には「人間の本性の探求」という使命感があって、「精神において人間は人間である、という抜きがたい固定観念のようなものが大川には内在し

てい」⁶⁵たことを指摘するが、そうした精神生活を第一義に考える大川が悟った人生の理想とは、宇宙の大霊と合致することであった。宇宙の大霊と合致するためには人格の発展が必要で、人格の発展のためには宗教、哲学、道徳にふれることや、天から与えられた義務を遂行することが必要で、宗教、道徳、哲学にふれたり義務を遂行するには、前提として教育が必要であり、それを阻害する貧困をなくすために社会主義国家の建設が必要である、というように「人生の理想」というところからはじまった論理が、社会主義の必要性を大川に主張させるのである。

大川 of 社会主義論には二つの批判が内在している。一つは「物質輕蔑・心理偏重」のキリスト教をはじめとする既成宗教への批判。もう一つは、「物質偏重・心理輕蔑」の唯物論的社會主義への批判である。大川はどちらも輕んじてはならないと述べる。しかしそれを同列に並べるのではなく、あくまで「心理」が目的で「物質」がその手段ないし前提でなければならないとい主張するのである。彼が社会主義を求める動機は、觀念世界の充實を図るためであって、およそ唯物的社會主義とは似ても似つかないものであった。大川が寄稿した『新紀元』は『平民新聞』が廃刊となったのち、平民社に集う木下尚江、安部磯雄、石川三四郎らキリスト教社會主義者が中心となって創刊した雑誌であったが、一方の唯物派が創刊した『光』ではなく、この『新紀元』の方へ載ることとなったのは、内容からして明らかであろう。

明治社會主義はキリスト教と深い関わりの中で誕生した。それは既述の通り、社會主義者として必要な動機の多くをキリスト教的人道主義に負っていたという背景に加え、宗教的なものを異質として排除する力が働くだけの精度が、まだ当時の社會主義にはなかったからであった。同様に、大川 of 宗教的な論理と結びついた主張が「社會主義論」となれたのも、そうした緩さがあったためであった。しかし『平民新聞』創刊以後、我が国においてもマルクス主義研究が進展によって、進化論から説明されていた唯物論が弁証法的になされ

るようになるなど、社会主義が次第に科学的色彩を強めていくにつれ、こうしたものは排除されていった。

太田はこの二つの社会主義論を発表して以後、「社会主義」という語を理想の社会像を描く上で用いることはなくなった。しかしここで展開した論旨は生涯を通じて変わることはなく、人生において重要なのはあくまで精神領域の充実である、という観念世界を根柢に敷く主張を彼は続けた。ゆえに太田が社会主義から離れていったというよりも、社会主義が太田から離れていったと述べるほうが適当かも知れない。観念領域すらもやがては止揚されて唯物領域の一つとなると主張する社会主義思想が、太田の思想と相容れなくなるのは当然であったと言えよう。

おわりに

晩年に書かれた自叙伝『安楽の門』は、太田の宗教論の集大成であるが、そこで彼は宗教を「自己の生命の本原に還ること」であると定義する。そして「有限なる個人が生命の本原たる無限者に融合する心境」を「誠」と呼び、至誠を以て「人間が至って尊しとするものを奉じて他意なく余念なき心境」こそが「宗教の真髄」であるとする。続けて太田は、「誠を以て一事を奉ずるところに唯一無上が宿り」、「唯一無上なるが故に、全力を挙げて奉事せざるを得なく」、「その奉事するところ、即ち自己の天地であり、また他あるを知らない。それ故に精神おのづから安住を得て、心が初めて落ちつく」のであり、既成宗教の信者とならなくても、「至誠の人は皆な真実の宗教人である」と語るのである。

この定義は、青年太田が発表した「吾個人主義者也故に社会主義者也」における主張とほぼ軌を一にする。今一度その論旨をまとめたうえでこれを比較したい。

太田によれば人生の究極の理想とは、「宇宙の大霊と合致すること」であるという（宗教とは「自己の生命の本原に還ること」であるという定

義に対応する）。では大霊に合致するためにはどうすればよいか。各々が宇宙の大霊から与えられている義務を果たして、個性を発展させ自我の実現をはかればよいという（「至って尊しとするものを奉ずる」ことという定義に対応する）。つまり、人生の理想を追及すること、人生の理想のために天命を尽くすことが宗教なのである。

太田は、青年時代に抱いた「宗教とは何ぞ」という問への答えを晩年になって見出した。そしてその答えは、青年時代に、社会主義という方法を以て人生の意義を人々が実感できる世の中につくりかえるべきだという、自らの主張の内にあったのである。故に、太田の社会主義論は、彼の宗教論との深い結びつきの中から生まれたものと言えるだろう。

では青年太田が抱いたこうした社会主義思想は、それ以後の太田にどのような影響を与えたのか。橋川文三は『昭和維新試論』⁶⁶において、朝日平吾による安田善次郎暗殺と、明治テロリズムとの動機の違いに着目し、被支配者の資格において、支配されるものたちの平等＝平均化の欲求が底流にあったことを指摘する。朝日は、平等に幸福を享有すべき人間の権利を阻害するものとして一切の特権者層を見、安田暗殺へと及んだ。朝日には、人間的幸福の探求上に現れた思想上の一変種というべき、一種不幸な悲哀感を持っており、こうした心情と行動に橋川は昭和維新の源流を見るのである。維新を画策した太田自身には、このような悲哀感はなかった。しかし太田は、多くの人がこうした悲哀感を抱かざるを得ないような社会に対する悲憤を常に持っていた。人生の理想を追求し幸福を享有することは、人間にとって当然の権利であるという主張は、先に太田の社会主義論において確認したところである。こうした当然の権利が踏みにじられている社会は改めるべしとして、太田は国家改造を志向した。その手段が青年太田には社会主義であり、壮年太田には昭和維新であったのである。

太田は昭和維新をアジア主義運動と不可分のものとして訴える。復興アジアの実現には、日本が

盟主となってこれを指導援助しなければならないが、原状の日本はこの重責を負えるような状態にない。よって「吾等の社会的生活、その最も具体的なるものとして吾等の国家的生活に、吾等の精神的理想に相応する制度と組織とを与えねばならぬ」⁶⁷というのである。しかし大川は、興亜運動の中でこうした国内問題を発見したわけではない。このことは若き日の大川において既に認識されていた。

時代が進むにつれ大川の思想は深化し、行動も多岐にわたるようになる。しかしそうした中においても、彼が生涯にわたって追及し続けたのが「人生の理想」であり、これが彼の思想や行動を規定する因子だったのである。

＜はじめに＞

- 1 竹内好「大川周明のアジア研究」『竹内好全集』第八巻（筑摩書房、1980）177頁
- 2 三沢伸生「大川周明と日本のイスラーム研究」『アジア・アフリカ文化研究所研究年報』37号 2002、鈴木規夫『『回教概論』（1942）大川周明（1886-1957）—日本イスラーム研究草創期の一道標』『現代思想』33号（臨増）2005.6、白杵陽「大川周明のイスラーム研究—日本的オリエンタリストのまなざし」『季刊日本思想史』72号 2008など、日本のイスラーム研究の草分けとして大川が注目された。
- 3 佐藤優『日米開戦の真実 大川周明著『米英東亜侵略史』を読み解く』（小学館、2006）
- 4 呉懷中『大川周明と近代中国』（日本僑報社、2007）
- 5 大川周明『頭山満と近代日本』（春風社、2007）この著書は中島岳志氏の編集によって半世紀を経て出版された。なお、原稿発見のいきさつなどは「新発見！大川周明・幻の原稿」『論座』（2008.1）にも詳しい。
- 6 関岡英之『大川周明の大アジア主義』（講談社、2007）

7 青年期大川の伝記研究に、大塚健洋氏による「大川周明の思想形成 —「反西洋」の精神史を中心に—」『法学論叢』第117巻6号・1985年9月、119巻3号・1986年6月、『大川周明と近代日本』（木鐸社、1990）、『大川周明』（中公新書、1995）などや、刈田徹氏による「五高時代における大川周明の思想と行動に関する一考察」『拓殖大学論集』第161号・1986年7月があるが、両研究とも大川の中でキリスト教と社会主義が連続しているのか、あるいは断絶しているのかが不明瞭であり、また当時の時代状況の中に大川を位置づける作業が十分に為されていないため、青年大川の社会主義思想が如何なるもので、壮年大川の思想や行動にどのような影響を与えたのかが十分明らかにされていない。

8 竹内好によれば、大川の思想は彼が大学を卒業してアジア問題に関心を向けはじめる頃には固まっていたという。竹内・前掲書（注1）192頁、196-7頁

9 大塚健洋『大川周明』（中公新書、1995）32頁

＜第1章＞

- 10 大川よりも5年はやくに生まれた岩波茂雄によれば、「乃公出でずんば蒼生を如何せん」といったような慷慨悲憤の時代のあとをうけて、「人生とは何ぞや、われは何処より来たりて何処へ行く」というようなことを問題とする内観的煩悶の時代へと推移したと述べている。橋川文三『昭和維新試論』（ちくま学術文庫、2007）86頁
- 11 松沢弘陽『日本社会主義の思想』（筑摩書房、1973）9-10頁
- 12 橋川・前掲書（注8）69頁
- 13 この時期の大川の日記からは、彼の煩悶がうかがい知れる。「不潔貧鈍卑賤なる予も、自らの行ひが何う云う様であるかと謂ふことを思ひ、あゝ如何にもして正道を歩み、誠実に働き心の中に真を語る人格となり度い、と云ふ希望がむらむらと起って来て、これまで成した悪い行や、卑しいわざのことなど思ひ回らすと、なんとも云へない良

心の呵責に遇って、心が無茶無茶になって仕舞った。煩悶と云ふのは斯の様なことであらうか」(明治36年10月11日)

14 1897(明治30)年に社会問題研究会、社会主義研究会(1898)、社会主義協会(1900)、社会民主党の結成と即日禁止(1901)、日露開戦をめぐって非戦を軸に誕生した1903年の平民社がそれである。

15 絲屋寿雄『日本社会主義運動思想史』(法政大学出版局、1982) 86頁

16 隅谷三喜男『日本の社会思想』『隅谷三喜男著作集』(岩波書店、2003) 238-239頁

17 隅谷三喜男他「明治・大正におけるキリスト教から社会主義への動き」『出会いー日本におけるキリスト教とマルクス主義』(日本基督教団出版局、1972) 10頁

18 村井知至「社会主義」『近代日本キリスト教名著選集30社会主義／基督教社会主義』(日本図書センター、2004) 24頁

19 村井・前掲書(注16) 42頁

20 安部磯雄『社会主義者となるまで』(改造社、1932) 101-102頁

21 安部・前掲書(注20) 205頁

22 「予は如何にして社会主義者となりし乎」『週刊平民新聞』第9号・明治37年1月7日

<第2章>

23 太田周明「安楽の門」『太田周明全集』第一巻(岩崎書店、1961) 773頁

24 太田周明「日本精神研究」『太田周明全集』第一巻(岩崎書店、1961) 108頁

25 太田周明『太田周明日記』明治36年9月10日(以下『日記』)

26 この「心の日記」なるものは現存が確認されていない。

27 山形県鶴岡市観光連盟HP

<http://www.tsuruokakanko.com/cate/p0011.html>

28 マーク・R・マリンス・前掲書(注27) 82-83頁

29 太田・前掲書(注24) 775頁

30 マーク・R・マリンス、高崎恵訳『メイド・イン

・ジャパンのキリスト教』(トランスビュー、2005) 76頁

31 武田清子「解説」『社会主義』現代日本思想大系(筑摩書房、1964) 20-21頁

32 太田・前掲書(注24) 775-776頁

33 橋川・前掲書(注8) 66頁

34 太田・前掲書(注25) 109-110頁

35 太田周明「不浄中の真金を如何す可き乎」『太田周明関係文書』(芙蓉書房出版、1998) 39頁

36 『日記』明治37年1月20日

37 内村鑑三「基督教と社会主義」『近代日本キリスト教名著選集30社会主義／基督教社会主義』(日本図書センター、2004) 9-11頁

38 太田・前掲書(注24) 856頁

39 安部・前掲書(注20) 201-202頁

<第3章>

40 山本武利『近代日本の新聞読者層』(法政大学出版局、1981) 95-99頁

41 『中央公論』明治34年12月号

42 中村・前掲論文(注19)

43 荒畑寒村『平民社時代』(中央公論社、1973) 331頁

44 『明治文学全集』84巻(筑摩書房、1965) 406頁

45 1869-1944 群馬出身の宗教家・キリスト教社会主義者。『萬朝報』記者となり日露戦争では非戦論を展開。経済学者住谷悦治は甥。(『日本人名大辞典』講談社)

46 隅谷三喜男「キリスト教の歴史的視座」『隅谷三喜男著作集』第八巻 298頁

47 大塚・前掲書(注7) 31頁

48 『日記』明治36年11月3日

49 『日記』明治36年11月20日

50 『日記』明治37年2月3日

51 『日記』明治37年6月16日

52 西川は中学時代にキリスト教に入信し、札幌農学校で新渡戸稲造、内村鑑三の影響を受けたが、のちに社会主義に目覚め、東京専門学校政治学科を卒業後、『毎日新聞』に入社。そこで木下尚江

を知り、労働組合既成会で片山潜と知り合い、社会主義教会に入会した。絲屋・前掲書（注13）87頁

53 『日記』明治36年10月23日、明治37年1月12日

54 『日記』明治37年1月29日

55 『日記』明治37年2月6日

56 『日記』明治36年11月22日

57 『日記』明治36年11月21日 因みに、この本間という友人は大川に東京の正則英語学校を紹介したり、共に上京して一緒に社会主義者の演説会へ足を運んだり、大川に影響を与える存在であった。

58 『日記』明治37年2月3日

59 『日記』明治36年12月12日

60 中村勝範『明治社会主義研究』（世界書院、

1966）207頁

61 西田長壽「解説」『週刊平民新聞』第一巻（創元社、1953）7頁

62 松沢・前掲書（注9）4頁

63 松沢・前掲書（注9）3頁

64 山川均「ある凡人の記録」『日本人の自伝』（平凡社、1982）358頁

65 竹内・前掲書（注1）187頁

66 橋川・前掲書（注8）序にかえて

67 大川周明「復興亜細亜の諸問題」『大川周明全集』第二巻（岩崎書店、1961）6頁

（くどう しんすけ 北海道大学法学研究科修士課程修了）